12 月 18 日のメッセージ

聖書：イザヤ書　11：　1－10

「ひとつの芽が萌えいで」

いよいよ神の独り子の降誕の時が近づいています。

御子の誕生はまず、母となるマリアに告げ知らせられました(「天使は、彼女のところに来て言った。『おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。』マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。」ルカによる福音書 1:28-29)。もちろんそれはマリアにとって驚くべきことでありましたが、天使の言葉を受けて、落ち着きを取り戻します。人間の目にはあり得ないことのように思えますが、「神にできないことは何一つない」(ルカによる福音書 1:37)のです。

そして、人間から生まれた「その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる」(ルカによる福音書 1:32)。遠い昔、滅びてしまったかのように思われていたダビデの王座をくださるといいます。

「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで／その根からひとつの若枝が育ち」(イザヤ書 11:1)

ここで言われる「株」は切り株のことです。それも朽ちて、もはや命の片鱗さえも感じられないような切り株のことを言います。そこに神は新たな芽吹きを与えられるというのです。「神にできないことは何一つない」のです。

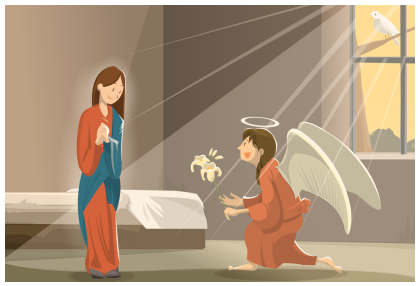
しかも、単に命を芽生えさせるだけでなく、「その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊／思慮と勇気の霊／主を知り、畏れ敬う霊」(イザヤ書 11:2)が留まり、「彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない」(ルカによる福音書 1:33)。

これは神が、「わたしは彼の子孫を永遠に支え／彼の王座を天の続く限り支える」(詩編 89:30)と約束されたことの実現です。神はイスラエルの民を決して忘れることなく、正義と公平を実現するために独り子をくださるのです。

しかし、なぜ、わざわざ独り子なのでしょう。第一義には、独り子ならば民に受け入れられるだろうとの願いです(「そこで、ぶどう園の主人は言った。『どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。』」ルカによる福音書 20:13)。

そして、第二義として、「だれ一人、神の前で誇ることがないようにするためです」(コリントの信徒への手紙一 1:29)。救いは人の力によってではなく、神の力によってのみ起こります。仮に人がその手伝いをすることがあったとしても、あくまでも主体は神です。だから、自分の力を誇るのではなく、ただ神に感謝することを教えられているのです(「『誇る者は主を誇れ』と書いてあるとおりになるためです。」コリントの信徒への手紙一 1:31)。

また、仮に人が手伝うことがなかったとしても、神の救いは前進しています。「その日が来れば／エッサイの根は／すべての民の旗印として立てられ／国々はそれを求めて集う。そのとどまるところは栄光に輝く」(イザヤ書 11:10)。必ず神がその正義と公平を実現される「その時」が来ます。



今、そのことを実感できないかもしれません。神の正義や公平は、切り倒された切り株のように思っているかもしれません。しかし、必ずそこから「ひとつの芽が萌えいで」ます。そして、「その時」は確実に近づいています。

だから、落胆することなく私たちは「その時」を待ち望むことができます。力強く神を見上げ、諦めることなく私たちも前進していくのみなのです。